

## International Journal of Childbirth 2011年第1巻第1号(英語)

ICM から ICM 公式雑誌(年〇回発行)が届きました。雑誌の概要をお知らせします。

(概要)

タイトル	著者名	概要
能力と適性 — 国際的な助産実践に関する中心的概念 —	・Judith T. Fullerton ・Atf Gherissi ・Peter G. Johnson ・Joyce B. Thompson	各国における助産師の存在は、妊産婦死亡率の低減に大きな役割を果たしている。国際助産師協会(ICM)は、助産師の国際的水準を満たす人材に向けて、活動領域を定義した基本方針を発表している。助産師に求められる能力と適性の意味を深く探求しており、これらを理解することが、助産師が個人レベルでも組織レベルでも、存在感と発言権を強めていくことに役立つ。また、これらは、助産師の教育、法律、規則や人員配置などを考えるうえでも重要である。
母になること — ヨーロッパ3カ国に見る女性の期待から経験への旅路 —	・Ans G. Luyben ・Sue R. Kinn ・Valerie E. M. Fleming	欧州各国の妊婦へのインタビューを通して、妊婦のケアに関する概念的モデルを考察する。中心的な概念は「母になる人を、母のように接してケアする。」ことである。妊婦は母になる過程で、様々な心理的な変化と段階を経験していく。出産前の期待と実際とのギャップには、各国のケアの違いが浮かび上がる。妊婦の心的変化を考慮したケアが、今後望まれる。
地方でのマタニティケアにおけるGPの参画 — 果敢な挑戦か? —	・Jan Galdow ・Vanora Hundley ・Edwin van Teijlingen ・John Reid ・Alice Kiger ・Janet Tucker ・Jilly Ireland ・Fiona Harris ・Jane Farmer ・Helen Bryers	英国では、遠隔地における一般医(GP)の妊産婦医療への参画が著しく減少している。GPがこの分野に積極的に参加し、助産師と競合することで、女性に優しい医療看護環境が期待されるが、GPの心理的負担、人員や予算の不足、搬送や物流の問題等、解決すべき課題が山積している。また、既に遅きに失した感もあるが、教育の改善介入や定着に向けたインセンティブも必要である。
資源不足の状況で分娩後出血防止策を各地域ごとに展開すること — 批判的な考察と次のステップ —	・Sydney A. Spangler ・Alissa Koski ・Deborah Armbruster ・Cynthia Stanton	出産時に医療介入を必要とする妊婦の増加を背景として、妊産婦の死亡・罹患率を減らす対策が求められている。分娩後出血に対処する薬の使用は、地域ごとの決定が必要とされてきたが、出産の現場における具体的な検証を試みた。薬剤の使用は、医療施設ごとか、あるいは地域ごとの決定かが議論されているが、地域の対応は、全国的な分娩後出血対策の一部となりうる。
プールに飛び込む奮闘 — 水中出産における助産師の経験の批判的談話分析 —	・Kim Russell	助産師へのグループインタビューを通して、病院での水中出産に関する障害を分析している。コーディネーターの仕事の中での優先順位の低さや、助産師にかかる負担の大きさ、消極的な姿勢、組織のサポート不足を指摘している。病院での水中出産の成功には、設備面の充実のみならず、組織内での看護哲学も必要であり、管理職の助産師、コーディネーター、分娩室職員のサポートも、鍵を握っている。

\* 本会図書館のコピーサービスによる入手が可能です。